

## おばけの季節【聊齋志異篇】

陽羅 義光

鹿児島島の貧しい農村の俚諺に、こういうものがあります。

「うたは むごにききやい  
みちゃ めくらにききやい  
りくちゃ つんぼにききやい  
じょうぶなやちゃ いいごっぱっかり」

いまなら差別用語の連発ですが、じつに的を射た言葉で、「障害者賛歌」にきこえるのはもちろん、ひいてはどこか「おばけ賛歌」にきこえるところもあって、好きですねえ。

さて、おばけが登場する物語かずあれど、蒲松齡（一六四〇～一七一五）の『聊齋志異（りょうさいしい）』は、その質量及び文学性に於いて、別格です。

とうぜん『おばけの季節』が目指すのは、現代日本の『聊齋志異』ではありますが、これは『おばけの季節』ほどおばけが沢山でてくるわけではありません。

「聊齋」は蒲松齡の書齋名で、「志異」とは「ふしぎをしるす」という意であり、幽霊や妖怪の話のみならず、人間世界の不思議な話も多く扱われているからです。

よって、（古往今来最も沢山のおばけが登場する読み物である）『おばけの季節』が、（世界的な名作）『聊齋志異』よりも優れているなんてことはまったくありません。

今回はこの『聊齋志異』に、敬意を表した内容にしたい。

結果的に敬意を表したことになっているかは保証できませんが。

懐翁の活躍に期待するほかはありません。

禿光山人 拝

\* \*

「わしはいっぱい、おばけのえほんや、まんがや、ものがたりをよんだが、お

ばけがいちばんいっぱい、でてくるもんは、なんじゃろかのう」

ぼくは、そのとき一番興味のあることを、ききました。

「それは『聊斎志異』でしょうか。日本にも西洋にも凄い物語がいくつもありますが、中国のこれが一番でしょうね」

懐翁はすぐに答えてくれました。

「ちゅうごくは、でっかいくにじゃからのう。おばけもいっぱいいるんじゃろ」

「そうなんです、おばけの数の問題ではなくて、この世の中には、不思議でないことが、いっぱいあるんだということですね。逆にいうなら、不思議なことがちっともない世の中だとしたら、なんと味気のないものか、ということでもありますね」

「ううむ、てつがくてきじゃのう」

懐翁は目を丸くして、

「金ちゃんはどうして、〈哲学的〉なんて難しい言葉をしっているんですか」

「しらいでか。わしはおおきくなったら、てつがくしゃになりたいんじゃ」

「それは初耳ですね。金ちゃんは小説家になりたいのかとおもっていました」

「そのおもいは、たんじゅんすぎるのう。せかいやうちゅうは、ふくぎつなもんじゃ。なぞだらけじゃ。そのふくぎつでなぞだらけのせかいやうちゅうを、たんきゅうするのが、わしのきぼうじゃ」

「小説家もそういうものではないでしょうか」

「はずれじゃのう。しょうせつかは、しょうせつをかくひとじゃ。てつがくしゃは、てつがくをやるひとじゃ」

「恐れ入りました。わたしも実はこどものころは、哲学者になりたいとかんがえていました」

「それはいわんでも、わかっとる。かいじいは、わしにとっては、いだいなてつがくしゃじゃ。よって、わしも、てつがくしゃになりたいんじゃ」

「ありがたいことですが、金ちゃんは、わたしみたいになってはいけませんよ。わたしは哲学者ではなく、おばけの専門家にすぎません。そんな無意味なものになったら、人生棒に振りますからね」

「わしのかってじゃ。そんなことより、そのりょうさいなんとかの、なかみをはなしてくれや」

\*                      \*

はいそれではお言葉に甘えまして。

全部というわけにはいきませんから、わたしの興味のある、いえ、わたしも出逢ったことのあるおばけに絞って。

『聊齋志異』は十二巻と付録がついていますが、面白いのは前半に集中しています。

そのことと関係あるのかないのか、わたしが出逢ったおばけも、この本の前半に出てくるものばかりですね。

【じちゅうじん（耳中人）】は、耳のなかで蠅ほどの声でささやいてくる小人のなかの小人のおばけです。

「逢ってもいいぞ」

とささやいてくるから、

「逢ってもいいよ」

と答えると、耳の穴から飛びだしてきました。

とても小さいけれども、残忍（ざんにん）な顔をしているので、なにかされるとおもって身構えていましたが、外に人の声がきこえると、どこかへ逃げていきました。

【これん（狐聯）】は、美人にばけた狐です。

「あなたのお髯は、素敵ね」

と媚（こび）をうってきたので、

「わたしは、並ぶ者なき女嫌いです」

と答えると、

「なんて野暮なかた」

と行って、また媚をうってきました。

女性にもてるはずのないわたしは、これは狐だとわかったものですから、素っ気なく対応していますと、業を煮やして、

「上の句をつくるから、下の句をつくってごらんなさい」

と行ってきました。

おそらくわたしの無教養を、嘲笑うつもりだったのでしょう。

「露の世は露の世ながらさりながら」

と、上の句。

わたしは、続けて下の句。  
「露にうたれて露ほどしらず」  
すると相手は、苦笑しながら、  
「その程度の者を、くどいたわらわが馬鹿だった」  
と言い残して消えてしまいました。

【こうちゅう（江中）】は、長江にでるおばけですが、わたしが出逢ったのは大川でした。

そのころ、大川に橋はなく、わたしは渡し船に乗っていました。  
ちょうど川の真ん中にさしかかったとき、水面に青い火花が火花さながらに散ると、直後に水中から黒い大きな手が出てきて、船を揺り動かします。  
わたしが船頭に声をかけると、  
「心配ねえ、ときどき出てくるんじゃ」  
と、船頭は平然というのです。  
「でもこのままでは、ひっくりかえってしまいますよ」  
「心配ねえ、万一ひっくりかえったら、またひっくりかえせばいいだけじゃ」  
そして、平然と漕いで、向こう岸に着いたのです。

【ゆき（諭鬼）】は、大きな池にいるおばけです。

以前は、柘榴峠（ざくろとうげ）の横に、〈大淵〉とよばれる池があったのですが、そこは昔、刑場があったところで、罪人のおばけがでるという話でした。

その池の近くを通りかかった村びとが、何人も吸い込まれたということでした。

それでためしに、わたしも行って見たのですが、  
「あいつがきたぞ」  
「あいつがきたのか」  
「あいつがきてしまったか」

などという、暗い無気味な声がいくつか、〈大淵〉の水底からきこえてきたとおもうと、それこそ瞬きしている間に、〈大淵〉はすっかり涸れ果てて、巨大な墓穴に似た穴があるばかりでした。

【でいき（泥鬼）】は、むかしこの祠にあった、塑像（そぞう）の鬼です。

その目玉があまりに輝いて美しかったので、村の一人の子供がそれを盗んでしまいました。

たまたまわたしが目撃したので、その子の家に行きますと、その子の兄が突然病気になったということで、寝込んでいました。

それで、その子と一緒に看病をしていますと、兄はつと起き上がって、

「おれの目玉を返せ」

「おれはおまえの顔も見えなくなったぞ」

「おれはおまえの心も見えなくなったぞ」

などと、何度も怒鳴ります。

その子は驚いて、

「あんまりきれいなんで、盗んでしもうたが、すまんかった。すぐに返すから許してくれや」

と泣いて懇願しました。

すると兄は、

「ならば許す。さらばじゃ」

そういいおえると、卒倒して死んでしまいましたが、弟が塑像に目玉を元通り戻した直後に、息を吹き返したのです。

【せんりゅう（銭流）】は、その名のとおり、銭が流れているというものです。

わたしの場合は、中川と小川の間（はざま）で、このおばけを見ました。

銭といっても、五円玉。

百万個千万個もの五円玉が、川になって流れているのです。

これは新しく〈間川〉とでも名付けようかとかんがえていましたが、それに気づいた村びとたちがこぞってやってきて、みんながその銭の流れに身を投じたわけです。

溺れ死ぬ者が出やしないか、と心配して眺めていますと、いつのまにか銭の流れは、すっかり流れ去ってしまって、村びとたちの掌のなかに、いくつかの五円玉が残ったばかりでした。

【ぎこ（義虎）】はもともと獐猛（どうもう）な虎のおぼけでした。

あるとき村はずれの家が、この虎に襲われ、息子が殺され、老いた母親だけが残りました。

わたしがあの手この手で、なんとか虎を捕まえ、

「殺してもいいが、おまえを殺しても息子は返らない。これからおまえは、息子の代わりをしろ。そうすれば逃がしてやる」

と虎にいいますと、虎は約束をしました。

虎は息子に変身はできませんでしたが、たしかに約束どおり、老母のために息子の代わりに鹿や絹などを沢山くわえてきましたので、老母はそれを売って死ぬまで裕福に暮らしました。

老母が亡くなったとき、虎は自分の母が死んだほどに落ち込んで、いつまでも墓から動きませんでした。親類たちが怖がって騒ぐので、どこかに消えてそれきりになりました。

【びゃくれん（白蓮）】というのは、かつて一世を風靡（ふうび）した妖術使いのおぼけで、あるとき弟子を募集するために、この村にやって来ました。

ところが村の若者に、生意気なものがいて、

「うちの家の豚を人間に変えてみてくれや。そしたら信用して弟子になってやるで」

といいました。

内心怒った【びゃくれん】は、

「やってみるから、豚小屋には行ってごらん」

と若者にいいました。

若者がせせら笑いをしながら、豚小屋にはいりますと、一瞬のうちに、豚に変貌（へんぼう）してしまいました。

すると【びゃくれん】は、村びとたちに向かって、こう告げました。

「この豚小屋のなかに、あの獐猛な【ぶたおう】の化身がいる。その証拠に、豚のくせに人間の髪の毛が生えているではないか。早く屠殺（とさつ）して食べてしまわないと、この村に最悪の災難が起こるぞ」

たしかに見慣れぬ妙な豚がいたので、村びとたちはその豚をすぐに屠殺して食べてしまいました。

こうした事件が何件もあったものですから、村長に頼まれて、わたしが【び

やくれん】を村から追い出しました。

どうやって追い出したかは、(正直自慢にもならないので) やめておきます。

のちに【びゃくれん】は、隣村で、本物の豚に食われてしまったという、風の噂がこの村に届きました。

【ぞうちく (造畜)】は、【びゃくれん】の一番弟子で、師以上に、人間を動物に変えるのがうまい、妖術使いのおばけです。

その方法は、とにかく食べものや飲みものをいくらでも与えて、理性的な頭を使うすべを奪って、連れて行ってしまいうのです。

これを「口説く」といいますが、連れていった人間を思い通りの動物に変えて、家畜として働かせるのです。

【ぞうちく】がこの村にやってきて、口説きはじめて三日も経たずに、村びと三十人が神隠しにあいました。

わたしのことも口説こうとして、ごちそうを持ってきましたが、

「わたしは、うんこを食べ、おしっこを飲んで生きているのです」

というと、それから吐気がとまらなくなったらしく、いつのまにか逃げ出していました。

噂によると、いつまでも吐気がとまらないので、自殺したそうです。

おばけでも自殺するというのを、はじめて知りました。

【たくよう (宅妖)】は、部屋のなかにいるおばけ、というよりも、部屋のなかの物を盗んでしまうおばけです。

ある日、村長が町での会議から三日ぶりに帰宅して、いつも自分が坐っている椅子に坐りますと、気味悪いくらい柔らかくなっていて、坐りごこちがわるい。

不審におもっていると、椅子は溶けて流れて、部屋の壁に吸い込まれてしまいました。

それが椅子だけでなく、応接間に飾ってある鎧とか壺とかも、溶けて流れて、壁に吸い込まれてしまいました。

わたしが村長に呼ばれて、村長の家に行きますと、部屋のなかの物はすべて消えていて、気持よいくらいがらんどうでした。

わたしが壁の隙間から中に入って行きますと、【たくよう】がのんびりと村長の椅子に坐り、鎧だの壺などを眺めてご満悦（まんえつ）の様子でした。

「【たくよう】さん、ずいぶんたくさん盗みましたねえ」

とといいますと、【たくよう】は悪びれることもなく、

「金も物も、高きから低きに流れる」

といたしましたので、

「いまは【たくよう】さんが、その高きで、村長さんがいまは、低きですよ」

とといいますと、【たくよう】はしばらくかんがえていましたが、つと消えてしまい、いつのまにか村長の物は、ぜんぶ村長の部屋に返されていました。

まだ逢ったおぼけはいますが、きりがいいのでこのあたりで。

\* \* \*

「かいじいよ、どこが、きりがいいんじゃ」

「十紹介しましたから、きりがいいでしょう」

「そらあ、すうがくてきなきり、というやつじゃ。かつてに、じゅうにんといろ、とか、じゅうねんひとむかし、とか、きめつけてやがる。わしのきりは、じゅうではなく、にじゅうじゃ。はたちになったら、いちにんまえというじゃろ。かいじいのはなしは、はんにんまえじゃ」

「では金ちゃん、いずれまた」

「いずれとは、いつじゃ」

「十歳の金ちゃんが、二十歳になったときですね」

「りょうかいじゃ。きりがいいのう。それまで、かいじい、げんきでいろよ」